

◆概況

○日銀が10月3日発表した短観によれば、日本経済が東日本大震災後の落ち込みから着実に回復しつつあることを裏付けたとするものの、円高や世界的な株安の要因を背景に先行きに不透明感が強まっている。また、大手百貨店の9月の売り上げ高では、ブランド服や高級時計、宝飾品などの高額商品が好調であったものの衣料品が伸び悩んでいる。

また、「生活意識に関するアンケート調査」で個人の景況感を示す判断指数(DI)はマイナス62.4となり、悪化は2期連続で2009年12月以来の低水準だった。家計の収入が減り、暮らし向きが悪くなったと考える人が増えた。

○震災から7ヶ月が経過し、特に影響の大きかった東北・関東の小売市況は少しずつではあるが影響が薄れつつあるようだ。しかし、白生地商戦は実需を迎えたが、例年以上に動きは悪く、経営環境は厳しさを増している。要因は、販売不振に加えて昨年の当初から値上がりが続けていた生糸価格が、この6月をピークに徐々に値を下げ8月以降は暴落に近い状態となった。糸価の高騰を見越して生地を手配したものの、糸価の値下がりには生地価格の落ち着きを待つ模様眺めとなり荷動きは極端に悪くなっている。そのため各産地への発注は大きく見送られており、在庫を減らすことに注力している状態である。

◆流通・販売

○東北・関東方面について、どの業態も売れ行きは落ち込んでいる。関西でも影響は避けられないとしながらもまずまずの数字が得られたところもある。

東北は、祭りや節目の行事を大切にすることから「礼服関係」や「お支度品」についてはそこそこ動いた。震災からの時間経過と共に、東京での問屋向けの振り袖関係の催事では、例年に近い売上が確保でき、震災の影響は徐々に回復基調にあるとするものの柄数は昨年より少ない。また、東北には遠慮の気持ちから、売りに行けていないとの言葉が聞かれた。しかし、ものを作るところには客は集まるとしている。

○染物は、秋の催事(10月から11月)の出来高によって年間の利益が決まる。大切な商戦であり期待が掛けられている。

着物の需要は年々減少している。ある程度仕方のないことだ。現在の生産量と消費量はほぼバランスが取れている。問題は流通在庫が減っていない。物が溢れた状態では安値となってしまう。そのため、織や染の生産現場では、手間に比例した工賃が出せない。小売りからは催事だけに物を貸してほしいなど、リスクを持った商いが出来ていないなど負のスパイラルの中にあるとしている。

○和装品のネットショップによる販売は大きく伸びてきた。そのショップの課題が、商品価値を明らかにして、その価値感をどのように伝えるかにある。女性はあこがれの着物を買うまでのプロセスを楽しんだり、肌の色に合わせた色合いを求める。また、生地を見て、柄や色を決めるまでの会話を楽しんで着物は作るもの。そのためネットショップには限界があるとの意見が聞かれた。

しかし、一方では、多忙な女性をターゲットに、ショップへの入りやすさ、価値観をどのように見せるかなど見やすさと奥深さ、ライフスタイルに合った良いものの提案で、リピーターを確保して商いは出来るとしている。

◆生産・商品

○販売不振に加え、糸価の下落は「生地はもっと安くなる」との模様眺めで商ができない状況にある。まずは手元の在庫を減らすことが先決としている。

○この状況は、新しい地紋を作っても値が通らない。売値が決められてくる。地紋や柄にはこだわらない。安い生地でよい。意匠は染めに任せてほしいといった話が聞かれた。

しかし、中には、将来の和装業界を展望して、各産地の後継者不足や関連業種の衰退に伴う生産基盤の弱体化を危惧している。

○着物は日本文化を受け継ぐものであり、携わる人はその誇りを持ってほしい。手を込めた「ものづくり」でその価値が説明できる後継者が育ってほしい。手を抜かないものづくりは価格は後からついてくる。○丹後産地は量ではなく高品質で小ロット、スピード感を持ったものづくりが必要である。作り手が着る人とふれあうこと、市場をよく見て手薄になったものを手がける工夫と、それぞれの取引先との柄作りが必要であり、売り先を守ることも大切であるとしている。

○輸入織物は、高度成長が続く中国からは、振袖など表用の生地、帯揚げなどの小物の輸入が減少している。このままでは商品がなくなる。あらためて、国産の織と染の「ものづくり」のパイプを太くした協力体制が必要。そして、機場を大切にしたいとの若い当主の言葉が印象的でした。

◆西陣メーカー

○震災後、帯地についても販売不振や小売価格の下落はさらに拍車が掛かり、生産数量も利益も6掛け程度ではとの厳しい見方をしている。機を止めたり廃業の話の中で、ものづくりができていないのが現状である。

○帯地は5万から6万本の越数のものが多かった。流行もあるが、多色使いはコストアップとなるため、3万から4万越のシンプルな色目や柄行きのもので生産性を高めている。また、産地問屋の取引と比較して、利幅が得られる前売り企画品で繋がり、採算確保に努めている。

○生産面において、西陣も丹後も織手の高齢化が進み、色糸の切替の多い唐織や本袋・つづれの帯地などの製織が困難となってきた。加えて高齢化による廃業の補充ができない。ここ数年で生産現場は大きく変わる。いかに若い後継者を確保し育てるかが最大の課題である。また、現在の織り工賃では後継者は生まれにくい。帯地で1台15万円程の工賃がないと生業として取り組めないだろう。西工の第7次西陣産地振興対策ビジョンに示された改善目標の「丹後出機の最低工賃」について同感の意を示された。